

Let's Have a Nice Cuppa !

郵政事業庁総括専門官 大江 宏子

数年前、ロンドン大学LSEで各国の政策動向、政策課程論を学ぶ機会を得た。我が国の中央省庁再編、郵政公社化等の議論が英国でも報道されていた頃で、指導教官から、しばしば論戦を挑まれたものである。

彼の部屋で議論することが多かったが、息詰まると、キャンティーンに場所を移して、まあ、お茶でも飲みながら、ということになる。そういう時、彼は必ず「Let's have a nice cuppa !」と嬉しそうにのたまうのだ。

キャンティーンでは、湯の入ったカップとティーバッグが出される。彼は、おもむくに、ティーバッグを湯に浸すと、スプーンで「しごく」のである。カー杯ぎしぎしと。日本の紅茶教本によれば、ティーリーフをあらかじめ温めたティーポットに入れ、茶葉がゆったりとジャンピングし、brewされた紅茶をカップに注ぎ……と優雅な紅茶の淹れ方論が展開される。しかし、某英国紙が行った調査によれば、「英国人の95%はティーバッグ」を愛用し、「お手軽なマグカップでガブガブと飲み干している」らしい。実践的かつ豪快な紅茶の淹れ方である。SavoyやRitzなど一流ホテルのアフタヌーンティーで供される紅茶もティーバッグが主流でリーフティーを珍重する日本の紅茶文化と異なり、硬水でもしっかりと風味が出るカットされた茶葉のステイタスは、ティーバッグを含めて極めて高いのである。英国で販売されているティーバッグの茶葉の90%程度がケニアなど東アフリカ産であることもあまり知られていない。タンニンが豊富で硬水に負けないし、ミルクにも実によくあう。

後日発見したのだが、英国の小学生用の教本に、「おいしい紅茶の淹れ方」が載っている。Mr. Whiteの紅茶の淹れ方、と題するその記事は、「電気ケトルのスイッチを入れ、マグカップにティーバッグを放り込み沸騰した湯を注ぎ、スプーンでしっかりしごきましょう」という調子である。

「アニマルファーム」や「1984年」の作者である

ジョージ・オーウェルは「A Nice Cup of Tea」なるエッセイを残している。彼によると、茶葉はインドかセイロン産に限り、茶器は陶磁器製が一番、紅茶は濃くしなければならず、本物のtea loverは砂糖など入れずに飲むべし、ということになる。また、英語辞典の編纂で名高いジョンソン博士は、女性とデートした際、わずかに25wordsしか発声しなかった間、大きなマグカップで25杯もの紅茶を飲み干したという逸話を残している。その余りに大きなマグカップは、彼が卒業したOxfordのPembroke Collegeに保存されている。お茶好きの英国人には、かのグラッドストーン宰相も名を連ねる。彼は、湯たんぼの中に紅茶を入れて就寝したとか。夜中に目覚めた時、すぐに大好物の紅茶を飲めるようにである。そういえば、今は民営化されたBritish Railが、かつて70年代、「elevenes」、即ち午前11時のお茶時間を勝ち取るためにストライキを行ったのは有名な話。また、第一次世界大戦時、英国陸軍兵の兵嚢袋には、紅茶葉が入っており、前線の兵士たちは、これを水筒の水で抽出し、紅茶の味を堪能したという。紅茶の解毒作用も念頭においた配給品であったと言われている。

ことほど左様に、紅茶と英国人の密接不可分な関係を示すエピソードは数限りない。実に自然体、時には頑固に、英国人は紅茶を楽しんでいる。紅茶は英国人の生活そのものだ。そういえば、かつてしばしば参加したジュネーブの某国際機関の会議で、英国人チェアパーソンは、アジェンダにはcoffee breakと印刷されているにも関わらず、その時間になると必ず、「さあ、tea breakにしましょう」と声高らかに宣言していたものである。

もともとコーヒー党であった私も、今やすっかり紅茶党。3年ぶりに戻ってきたここ郵政研究所でも、旅行の都度買いこんでくる、英国スーパーTescoやSainsbury'sの格安超美味なティーバッグをしごきながらマグカップで愛飲する毎日である。